

クラブ活動としての吹奏楽の変遷

—女性進出の視点から—

森 田 信 一

(2005年10月14日受理)

Explosion of Girl's Power in Japanese School Bands

Shinichi MORITA

E-mail : moritas@edu.toyama-u.ac.jp

キーワード：吹奏楽，ブラスバンド，クラブ活動，部活動，ジェンダー，女子

Key words : wind ensemble, symphonic band, school band, brass, female

はじめに

中学校，高等学校の吹奏楽は，戦後の混乱が落ち着くとともに再開し，昭和20年代から30年代を通じて活発になっていった。教育制度のうえから見ると，昭和33年に発行された学習指導要領で，音楽で歌唱や鑑賞と共に器楽が具体的に導入されることになった。しかし，ここには金管楽器や弦楽器は入っておらず，金管楽器や木管楽器を使う吹奏楽は，授業の中には置かれていない。指導面，経済面，時間面を考慮し，また学習の平等性から，吹奏楽は課外で行なうべきであるという考えによる（花村 1960）。やがて課外を中心として，徐々に管楽器類も学校に浸透するようになり，木管，金管，打楽器による吹奏楽という形態は，課外という位置づけのまま，コンクールを動機付けとして徐々に活発になっていく。1939（昭和14）年に組織された吹奏楽連盟は，戦後は1956（昭和31）年に全日本吹奏楽連盟として再出発し，継続してコンクールを開催してきている。また1953（昭和

28）年から続いている民放系の「こども音楽コンクール」でも，徐々に管楽器によるアンサンブルが盛んになっていった。このようにして学校の吹奏楽は，戦後の復興から昭和30年代を通じて課外活動として成長し，コンクールの充実とともに活動を継続してきた。

ところで現在，吹奏楽部は，合唱部と同様，女子中心のクラブである。昭和40年代までを知る人の記憶の中では，吹奏楽部というと男子のクラブというイメージが支配的であろう。ところが現在では，メンバーの中に男子は非常に少なくなっている。調べてみると，昭和40年代から50年代にかけて，吹奏楽部への女子の進出が進んだらしい。それは男子中心でやってきた吹奏楽の部員減少が進み，代りに女子が入るようになったと捉えるべきなのかもしれない。吹奏楽は，特に日本では軍楽隊にルーツがあるので，男のものであったはずだ。そもそも，トランペットやトロンボーンを始めとする金管楽器は，体力的に女にはできないという通念が，戦前から戦後にかけて存在していた。

現在は、吹奏楽部は女子中心のクラブというのが常識であり、女子に金管がやれるかどうかなどという議論は過去のものとなっている。これはどういふことなのだろうか。男子は吹奏楽に興味を失ったのだろうか。女性の社会進出に関連したことなのだろうか。それとも、もっと大きな社会の変化が背景にあるのだろうか。

本稿は、こういった吹奏楽部の移り変りを、記録や雑誌から、また調査によるデータとして確認し、更にその原因を考察する。そして、吹奏楽というものの最近の変化とこれからの方向についても検討した。

1. 吹奏楽の進展と女子の進出

日本の学校において、吹奏楽は正課に取り入れられたことはなく、一貫して課外のクラブ活動として実施されてきた。学校の授業の記憶としては一般的に、リコーダ（スペリオパイプ）、ハーモニカ、鍵盤ハーモニカなどの経験が多いのではないだろうか。吹奏楽は、たいていはクラブ活動として放課後に行われてきたので、児童・生徒全員が経験するものではない。戦後の器楽教育の状況について、いくつかの文献から窺うことができる。戦後復興の時期も少し落ち着いた昭和33年の「学習指導要領」（文部省 1958）で器楽活用が具体的に述べられたことで、楽器業界も活気づくことになった（全国楽器協会五十年の歩み 1999）。

それを契機に、楽器の需要が飛躍的に増大して、楽器の商売は学校によって支えられた。更に、同四十二年度から施行された文部省の教材設備基準が、学校音楽発展への支えとなったことも確かである。（P.40）

つまり、それまで試案だった学習指導要領が、明確な基準として確立され、その中で器楽を行なうように述べられた。更に教材設置基準が施行されたということは、楽器を買う予算が与えられたということになる。これによって楽器業界が大いに潤うこととなった。文部省の方針は、日本の楽器業界に大歓迎されたことがわかる。また、主催の都道府県に設備拡充の予算を与えることを目的の

一つとした国民体育大会では、セレモニーや応援で吹奏楽が必要となることから、吹奏楽設備にも予算が振り分けられた。このようにして、昭和30年代の経済成長に伴って学校への予算も増え、楽器も徐々に揃えられていった。中学校そして高等学校で吹奏楽クラブも増加していった。

しかし昭和40年代になると、クラブ活動としての吹奏楽の人気に陰りが見えてくる。昭和42年の出来事として、「吹奏楽講座」で次のように述べている（吹奏楽講座7 1983）。

一時のベビー・ブームが収まり、中学生生徒の絶対数が減少し始めてきた。したがってバンドにもその影響が現れ、入部者が減り運営がむずかしくなってきた。加えてクラブ活動が不活発な様相を示し始めてきた。高校ではベビー・ブームの波が来て、大学受験という問題とからんでクラブ活動とバンドの関係が不明確となり、特に普通高校にその兆候が現れてきた。そのため職業課程の商業・工業高校が有利となってきた。（P.209）

吹奏楽ばかりでなく、クラブ活動が不活発になってきたことを、ベビーブーム後の中学生の減少と捉えている。また高校においてはベビーブームに伴って、大学入試の倍率が上がり、受験準備が忙しくなったため、クラブ活動が停滞したと言っている。

また同じ頃のでき事として、吹奏楽部における女子部員に関する記述も見られる。この時点でそろそろ、女子が目立つようになってきているということである。再度「吹奏楽講座」を見ると、昭和43年頃の傾向として、次のように述べられている。

中学校において女子生徒がバンドに多く参加するようになってから、高校においても女子生徒の希望者が多くなり、特に女子高校で吹奏楽を行うようになった。コンクールにも男子高校に互して堂々と演奏し、上位に入賞するところも出てきた。（P.211）

クラブ活動としての吹奏楽の変遷

吹奏楽において、女子の存在が目につくようになってきたということがわかる。それでは正確には、女子はいつ頃からどのようにして吹奏楽に参加するようになったのだろうか。もう少し詳しくそれを探ってみよう。

いくつかあった吹奏楽関係の雑誌で、もっとも長命な『バンドジャーナル』は、1959（昭和34）年に、管楽研究会の編集により発行されている。同年10月号の創刊号から現在まで継続して刊行されてきているこの雑誌のバックナンバーを通読すると、40年以上に亘るわが国の吹奏楽の移り変りのいくつかを拾い出すことができる。そこから女子の進出に関する記事に注目して拾いだしてみると、既に1960（昭和35）年11月号で「特集・女性と吹奏楽」が組まれている。ここで山本誘氏は「わが国は吹奏楽に対する認識もうすいので、地方では吹奏楽を楽隊と考え、演奏する者も男子のする者くらいい思っている人もかなりある。・・・（中略）・・・女子を募集してもなかなか希望者がなく、こちらからすすめる場合が多いと思うが、よく父兄に説明して家庭の協力を得なければならぬ。」（P.8）と述べている。昭和30年代の中頃には、まだ吹奏楽は男子のものという考えが一般的であったことがわかる。しかし昭和40年代になると、ずいぶん変化が見られる。1968（昭和43）年6月号には、再び「特集・女性と吹奏楽」が生まれ、そのリード文には「最近、女性だけのバンドや、あるいは普通のバンドでの女性奏者が、ふえてきました。そこで今回は、・・・」とある。翌年の1969（昭和44）年11月号でも「特集・女性はどこまで管楽器に挑めるか」が見られる。この中で、千葉県、埼玉県、大阪府の、コンクール出場校（高等学校）へのアンケートとして、女子部員の割合を調査した記事があり、アンケートに回答した37校の集計により、47%が女子となっている（P.40）。また、翌1970（昭和45）年10月号にも「第11回全日本学校吹奏楽研究協議会から」（P.51）という報告記事があり、中学校26校による集計によって48%が女子部員という結果が出ている。つまり、昭和40年中頃には、男女比が半々という段階まで進んでいたことがわかる。また、このような調査をしたこと自体も、女子増加への

関心を表すものであろう。1972（昭和47）年3月号の口絵には「盛んな女子高校吹奏楽演奏会」として4つの女子校が写真とともに紹介されている。1975（昭和50）年5月号には「特集・女性指導者からの発言」があり、その中で齊藤久子氏は「まして吹奏楽に関しては、年を追って、女子部員が増えている現在、女子だからこのくらいでよいとか、男子だからもっとやれるとか、そういう指導はしていないはずです。この過半数を超えようとしている女子部員の中から、この先どれだけすばらしい指導者が、たくさん生まれていくか・・・」（P.39）と述べている。1976（昭和51）年6月号では「特集・女子バンドの活動と今後」が組まれている。その中で、大橋武由氏は「また、男女混成チームでは、女子の占める割合がひじょうに大きくなったようです。中には男子はほんのわずかで、実質上には女子バンドとなんら変わらないチームもたくさんあります。」「かつての日本には、吹奏楽は男子のもの、女子は鼓笛隊という観念が支配しておりました。わが国では、吹奏楽は軍楽として発達しましたし、管楽器、特に金管楽器は、楽器の大きさと音のイメージからどうしても男子のものという考え方にとらわれてしまったものと思います。」と述べている（P.32）。村松勲氏は「ひと昔前までは、“女子が金管楽器？”などと言われたものです。」と述べている（P.36）。また対談の中で成田欽家氏は「個人的な意見ですが、やはり女の子が管楽器を吹くのが不自然だと思うのは極言すれば社会的な偏見だと思います。」と語っている（P.44）。つまり、バンドジャーナルにおいてたびたび登場する女性に関する記事から見ても、昭和40年ごろには半分近くが女子部員になっており、昭和40年代が男子から女子への転換期だったと言えるだろう。そして、昭和50年代に入ると、もう疑問の余地はなく、吹奏楽は女子のものとなったのである。

次に実際に男子部員と女子部員の数の比が、どのように変化してきたのかを、具体的な例で見よう。一例として、富山県立U高校の、1961（昭和36）年から2003（平成15）年までの吹奏楽部の3年生の人数を、データとグラフで示す（図1）。図1を見ると、昭和30年代から40年代へかけ

て、男子が漸減してきたことがわかる。それに対して女子は昭和40年代に徐々に増加し、昭和56年

からは2倍を超え、さらに平成以降はいっそう差が開いていったことがわかる（注1）。

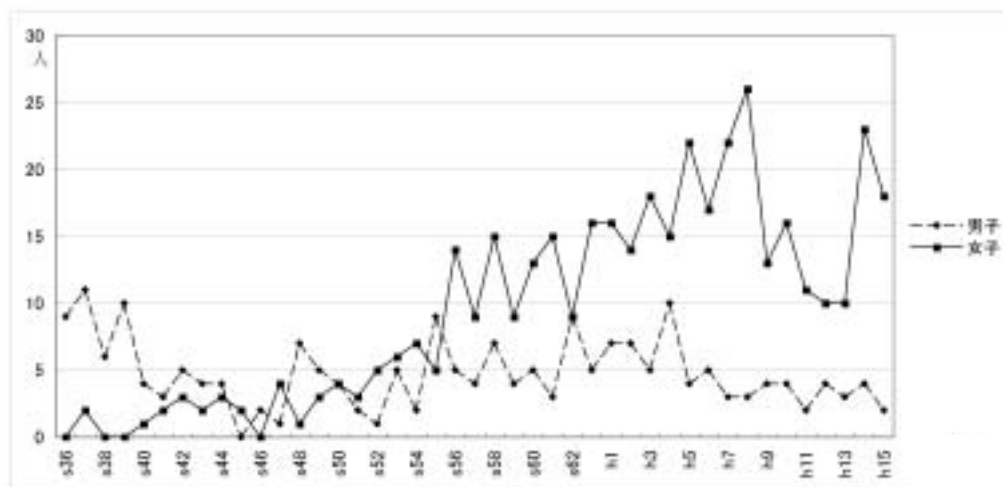


図1 U高校の男女部員数の推移

吹奏楽において、まだ女子部員が少ない頃、女子はフルートやクラリネットなどの木管楽器をやっていた。それは、肺活量や瞬発力などの関係から、金管楽器は女子にはできないと考えられていたからである。その後、女子は金管楽器へも進出するようになり、今やすべての楽器を制覇するに至ったと言える。

では現在の吹奏楽部の状況はどのようになっているか、これを把握するために、バンドジャーナルに長期にわたって掲載され続けている記事「練習中オジャマします」に注目してみる。これは写真を中心とした5ページ前後の記事だが、その中に部員のメンバー表が記載されていることがある。そんな中から最近のいくつかの例を拾って、部員の男女数を数えてみると、神奈川県横浜市立A中学校で、男子11名に対して女子109名（平成16年4月号）、奈良県立B高等学校で、男子15名に対して女子80名（平成16年5月号）、千葉県市川市立C中学校で、男子9名に対して女子60名（平成17年4月号）となっており、平均して男子がほぼ10%前後というのが現在の状況であることが推測される。

このように昭和30年代までは、男子のものだと思われていた吹奏楽が、今ではどこを見ても女子

中心のクラブになっている。女子が吹奏楽部の中心になっているような状況は、海外から見ても特異な現象のようである。石川喬雄（1976）は「吹奏楽のたいへん盛んなアメリカにおいても、女子だけのバンドはほとんどなく、その意味では日本の女子バンドはアメリカからも注目されています。」と述べている。つまり、現在の日本における吹奏楽というジャンルで、興味深い状況が育ってきていると言えるだろう。次にこの原因について検討する。

2. 女子進出についての考察

そもそも吹奏楽は、特に日本では軍楽にルーツがあったはずであり、そのため吹奏楽といえば男子のものという社会通念があった。第2次大戦の終了によって軍楽隊も解散し、そのメンバーはいろいろな方向へ広がっていった。警察や消防の音楽隊、その後の自衛隊の音楽隊、オーケストラ、または米軍回りのジャズバンドなどに活路を求めていった（高澤 2001）。学校の吹奏楽部も、戦前に続いて戦後も男子中心のクラブとして始まった。金管楽器は体力的に女子にはできないという社会通念が西洋にも日本にもあった（細川 2001）。そのことのひとつの例として、富山県立富山工業高

クラブ活動としての吹奏楽の変遷

校では昭和51年度まで、女子部員を禁止していた(富山県立富山工業高等学校吹奏楽部三十年史1987)。吹奏楽は女子にはできないという考えの規則としての表現である(注2)。

では、なぜ男子中心だったクラブが、現在の女子中心の状況へと変っていったのだろうか。吹奏楽部が現在のように、女子中心のクラブになったことには、まず男子部員の減少があるようだ。「吹奏楽講座」では、ベビーブームが去り、生徒数が減ったことによって、中学校での吹奏楽部員の減少があったと述べていた。中学校でのベビーブームのピークは、入学年度で昭和35年から昭和39年である。また高等学校のピークは3年後となるから、昭和38年から昭和42年であり、この昭和38年組が昭和41年から大学入試に押し寄せることになる。これによって大学入試の倍率が高まり、入学試験が加熱していった。ベビーブーム世代は人数が多いので、必然的に大学入試の競争が激しくなることになる。特に男子は学歴をつけて、そういった競争社会に備えなければならないという風潮が広まり、大学進学率そのものも高まった。その頃、女子の大学進学率は、男子ほどは伸びていない。女子の場合は、結婚して家庭に入るのがまだ主要な将来像だった。

もともと音楽のサークルは女子が多いのが普通である。ところが吹奏楽は、野外を行進したり儀式に参加したりという役割とともに、男がやるものであるというイメージがあった。男子の減少と反対に女子部員が増加していったことは、そういった観念に変化が起こったということなのではないだろうか。都市部を中心として、社会全般への女性の進出も始まるようになる。1960年代にアメリカで始まったウーマンリブの運動は日本へも伝わり、男女の性による社会的役割のうえでの差別の解消を過激に主張した。これの広がりや定着とともに女性学も確立し、ウーマンリブの過激さが和らいで一般化し、近年のジェンダーへとつながってきている。このような社会通念の変化に伴って、いろいろな分野への女性の進出が広がっている。タクシーや新幹線の運転手、企業や学校の管理職など、各種職業への女性の進出もあるが、スポーツでも、陸上競技、格闘技、ボディビルなど、か

つては男子だけの種目だったものへも女子が参加している。吹奏楽への女子の進出も、このような広がりや無関係ではないのかもしれない。こういった、日本社会の変化が背景にあったことが、この問題の大きな要因ではないか。吹奏楽の中心である金管楽器にも、こだわりなく女子が取り組むようになってきている。女子が吹奏楽部に入るとなると、元々幼少時からピアノなど音楽関係の習い事は女子の方が圧倒的に多いので、楽譜にもなじんでいて、楽曲の習得もスムーズなのではないだろうか。

男子減少の理由として、もう一つ考えられるのがギターブームである。1960年代から70年代にいくつかのギターブームが起った。ギターの流行によって、音楽好きの男子の一部が吹奏楽を選ばず、ギターへ移ったことも考えられる。まず、1963(昭和38)年にテケテケサウンドのベンチャーズが来日した。その影響によってエレキギターが流行し始めた。また1966(昭和41)年にビートルズが来日し、それをきっかけとしたグループサウンドもブームになった。また同じ頃、フォークソングもブームとなる。カレッジフォークの流行に乗って、お茶の間では、マイク真木の「バラが咲いた」が1966(昭和41)年にヒットした。関西を中心とした社会派の関西フォークも、1967(昭和42)年ごろから盛り上がりを見せた(北中1995)。

これらの出来事によって、若者がギターに関心を持ち、自分でもエレキギターやフォークギターを弾きたいと考えるのは自然の成り行きだろう。このギターブーム、特にフォークブームは、歌謡曲の場合と違って、見ているだけでなく、自分もギターを持って歌う、または歌を作って歌うという参加型だった。これによって、若者、特に男子がギターに向っていった。ギターの生産の国内出荷の推移を弦楽器工業組合から見ると(増井1980)、次のグラフのようになっている(図2)。ここでは、エレキギターは1964年から上昇している。アコースティックギター(クラシックギターとフォークギターの合計)は1965年から急上昇している。

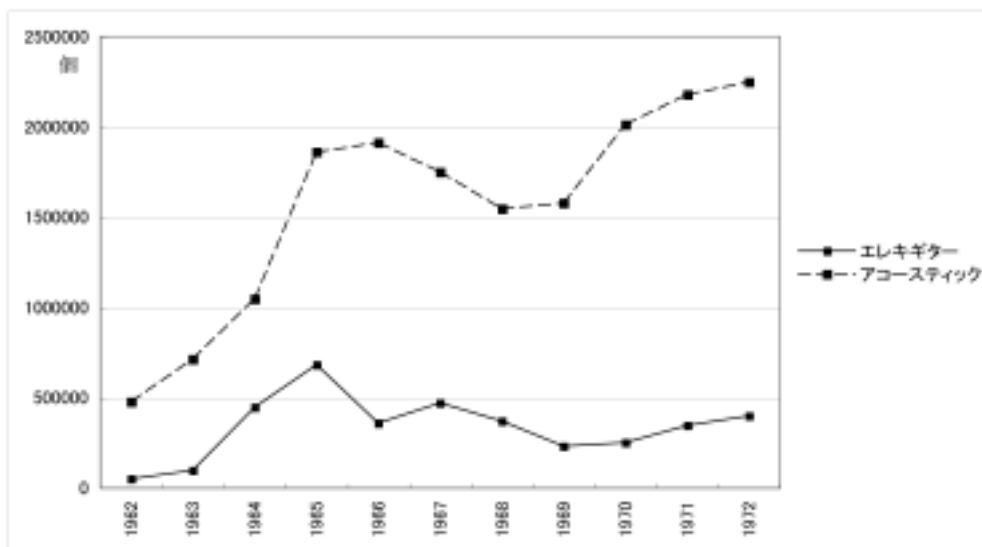


図2 エレキギターとアコースティックギターの国内出荷数

もともと音楽に関心があり、なにか楽器をやってみたいと考えている男子が、ブームに影響されて、ロックバンドやフォークソングへ向い、その結果として吹奏楽の男子部員が減少したと考えることができるのではないかと。ただし、男子の志向がギターへ移ったとしても、エレキギターは反教育的と見なされていたし、ポピュラー音楽も教育的でないと考えられていたので、フォークソングもあまり歓迎されていたわけではない。教育の場では、フォークソングが民族音楽同好会といった名称で黙認されたのが精一杯で、エレキギターは論外だった。従ってギター少年たちは学校の外へ向うことになる。戦後復興に続いて日本社会が豊かになり、昭和40年代になると娯楽も多様化するようになってくる。放課後はクラブ活動で勉強以外の趣味に若いエネルギーを燃やすということが普通だったのだが、そういう趣味の活動が徐々に学校の外へ広がっていった時期でもあった。クラブに所属しない「帰宅部」などという言葉も生まれた。

もう一つ考えられる大きな理由として、男子の運動部への移行を無視するわけにはいかない。現在、文化部はダサイ、運動部の方がカッコイイという風潮が一般的な感覚となっている。クラブ活動は運動部と文化部に分類されているが、日本全体をあげての大きなイベントだった東京オリンピッ

クを機にスポーツの人気が高まり、運動部が活発になったとも考えられる。東京オリンピックは、日本が戦後復興を成し遂げた1964（昭和39）年に開催され、それを機会に、国立競技場、武道館、駒沢競技場を始めとする競技施設と選手の宿泊施設のほか、東海道新幹線、東京モノレール、首都高速などの交通機関も建設された。競技面でも、バレーボール、体操、重量挙げ、マラソンなどで、日本チームが活躍し注目を集めた。これによって、クラブ活動でも運動部への関心が高まったのではないだろうか。バンドジャーナル（1968年12月号、P.34）には吹奏楽部指導者の発言として、「しかし、この二、三年、生徒数減に反比例して、体育のクラブ数が増えはじめたためか希望に燃えて入部してきた男生徒のヤツも、この頃は一人、二人と」去ってゆくという記述がある。また、東京の私立中・高一貫校W校（男子校）における、2005（平成17）年の資料によると、クラブ所属生徒のうち70%以上が運動部に所属しており、これは10年以上変化していない（注3）。これは、男子のクラブ活動への関心が、やはりスポーツへ向かう傾向が強いことを示している。運動部に入ることによって、中学時代または高校時代という成長期に、身体を鍛えようという発想が、本人にも親にも存在するものではないだろうか。

また、コンクールの加熱という日本の状況に何らかの特異性はないだろうか。吹奏楽部は、全日本吹奏楽連盟主催のコンクールを目指す場合、強力な指導者のもと、相当にハードな練習を重ねる。朝練習、休日練習など、運動部並みのスケジュールでコンクールを目指すことになる。大学受験を考えると、このような厳しい練習を嫌い、クラブを抜けてゆくようなケースもあるだろう。これが男子の場合に顕著に現れるということも考えられる。そしてこれが女子中心という、現在の特異な状況を作り上げているのではないだろうか。

このように、流行や、社会通念や、ものの考え方の変化、社会における女性進出など、いくつかの理由とその重層などから、吹奏楽部における女子部員の進出が進んで、日本特有の現在の状況が生まれることになったのではないだろうか。

まとめと今後の方向

以上、見てきたように、戦後復活した吹奏楽は、中学校そして高等学校を中心として、日本社会の復興とともに活発になり、コンクールをよりどころとして発展していった。日本の場合は、明治の開国とともに軍楽隊として吹奏楽が導入されたという歴史から、学校においても、吹奏楽部は男子部員中心のクラブ活動だった。これはほとんどが女子部員で成り立っているという現在の吹奏楽部の状況からは想像のつかない形態である。現在までの間にどんなことが起こったのだろうか。吹奏学部の発展の中、日本の高度成長期の昭和40年頃から部員数の減少が起こり、同時に女子の進出が目立つようになっていった経緯を、本論では多くの資料から明らかにした。男子の減少と女子の増加は、その後も止まることがなく、昭和40年代を通じて顕著になっていき、昭和50年代には男女の逆転がほぼ決定的と言える状況になった。現状では、男子の割合は10%前後になっている。本論ではさらに、このような吹奏楽部員の男女比逆転の原因について考察した。要因としては、ベビーブーム世代の受験戦争によって、特に男子部員が後退したこと、あるいはギターブームの到来によって音楽好きの男子がフォークソングやロックバンドへ移行したこと、また社会生活が豊かになったこ

とによって趣味や娯楽が多様化したこと、あるいはコンクールを目指す加熱した練習方法に対する敬遠、そして東京オリンピック以後のスポーツ人気から起こったと考えられる運動部への男子の移行などについて検討した。このように、吹奏楽部における男子部員の減少と女子部員の増加という現象について、多様な要因を検討してきた。これらの要因のいずれもが作用し、また重なりあったことによる結果であろう。以上の議論によって、日本の学校の吹奏楽において女子が主要な役割を占めているという、現在の我が国における興味深い現象について、その経緯と原因を明確にすることができたと考える。

吹奏楽は、学校の課外授業活動として発展し、昭和40年代からは、女子の台頭によって、今日の日本の吹奏楽の特徴的な姿を形作ってきた。この吹奏楽のこれからの方向として、どのような形が考えられるのであろうか。ここでいくつかの方向を検討してみよう。

吹奏楽部を支え、活動の目標を与える旗印として、吹奏楽コンクールの果たした役割は無視することができないだろう。日本全国の各地域から、都道府県コンクール、ブロックコンクールを経て、全国大会へと駆け上っていく全日本吹奏楽コンクールは、毎年繰り返されるドラマを生んでいる。これは高校野球と同じように、全国大会レベルに到達するためには、強力な指導者の存在が不可欠となり、全国大会の常連校には、カリスマ的な指導者が存在する。野球と同じように、早朝練習から休日練習まで、指導者の熱く献身的な情熱によって、全国大会に登場していくのである。この大きな目標によって、全国共通の吹奏楽の基準が形成され、レベルが高められてきている。しかし、このようなコンクールの成功と同時に、一方には音楽を忘れてコンクールの勝敗のみを重視しすぎることへの警告や批判も常に聞かれる。

武蔵野音楽大学の客員教授として1971（昭和46）年に来日し、教育の傍ら1年4ヶ月の間、日本各地でバンドクリニックやゲストコンダクターやコンクールの審査員をしてきたアメリカの教育者、J.バダール氏は、日本のスクールバンドを高く評

価するとともに、次のように批判も述べている(バダール 1973)。

日本のバンドがコンテストのためにどれだけ片寄った練習をしているかということを見ました。彼らは一曲か二曲を、ほとんど一年間かけて練習しています。そのため、もっと広い経験をさせるという音楽教育の目的からはなれているように思われます。・・(中略)・・いずれにしろ、たいせつなことは指導者や校長先生が勝つことだけを考えてはいけないということです。われわれはスポーツのコーチではないのです。

また、八木(1991)は、吹奏楽部の弊害を鋭く説き、「吹奏楽部は社会教育に移行すべきである」と主張する。杉山(1995)は、コンクールについて「その底流には音楽になじまない競争原理が存在し指導者の価値指導性によっては各種の歪みが生じ音楽活動の本質である楽しさやお互いをわかりあえる人間性が喪失され、」「大編成のシンフォニックバンドだけが最高理想の演奏形態との認識がまかり通っている。」と警告している。

また、レパートリーを見ると、吹奏楽の演奏会のプログラムの構成の3本柱は、吹奏楽のオリジナル曲、クラシックのオーケストラ曲のアレンジもの、ポピュラー曲(映画やアニメのテーマ、ラテン曲、スウィングジャズナンバー)である。コンクールの自由曲では、クラシックの管弦楽曲を編曲したものが、全体の60%以上を占めていて、この地位は揺るがない。しかし、本来の管弦楽曲の弦楽器のパートをなど木管楽器で置き換えたことによって、それが不完全なオーケストラと捉えられ、弦楽器の欠如を木管楽器で間に合わせていると見られる恐れがある。従って吹奏楽の編成が拡充してシンフォニックバンドの形式を理想としていることが、かえって吹奏楽を、矛盾を持つ存在へと導いているのではないか。阿部(2001)は、次のように言う。

ホンモノの音楽は、その入り口を通過した奥にあることになる。「吹奏楽」でオーケス

トラの定番曲を編曲して演奏したり、「ポップス」を演奏するのは、ホンモノを経験したり音楽に興味をいだかせるといある種のシミュレーションであり、あくまで音楽教育の筋に沿うもの以上のものではないことになる。(P.18)

「ブラバン」は、学校のなかでアマチュアの課外活動として扱われることによって、学校で「健全」な音楽として扱われているクラシックと必然的に親和性を高めざるをえない。だが、そのクラシック自体からは、入り口扱いされているというのも現状である。(P.31)

吹奏楽の編成の形成と維持において、吹奏楽コンクールの存在が大きい。このコンクールが基準としているシンフォニックスタイルは、アメリカのバンドを手本にしてきている。しかし学校の設備として、管楽器だけでなく弦楽器までそろうようになると、吹奏楽はやがて徐々にオーケストラへ移行するという事も考えられる。吹奏楽の純粹な位置づけは、屋外での行進や儀式や応援ということになる。現在の管弦楽曲の編成もの中心のシンフォニックバンドという形を見直し、吹奏楽というものの存在意義を、もう一度考える必要もあるのではないだろうか。現在、シンフォニックバンドという縛りを離れて、吹奏楽のいろいろな形も出てきている。全日本吹奏楽連盟の行うコンクール自体も、時代の状況に応じて、吹奏楽コンクールの他に、マーチングコンテスト、アンサンブルコンテストなど、部門を追加してきている。

プラスバンドという用語、日本では吹奏楽を意味してしまうので、金管楽器だけのスタイルは、あえて英国式プラス呼ばれることが多い。1996年のイギリス映画「プラス！」(Brass Off,日本公開は1997年)で話題になったスタイルだが、イギリスでは職場の団体を中心として、19世紀以来の歴史があり、全国で5000ものバンドがあるといわれる(山本 1987)。編成はサクソルン族(ホルネット、フリーゲルホーン、アルトホルン、ユーフォニアム、バス)という音色の柔らかい金管とトロンボーンと打楽器で編成され、室内楽として位置づけられている。全国的にも、新しい動きとして

クラブ活動としての吹奏楽の変遷

このスタイルのバンドがいくつも誕生している。

吹奏楽コンサートのプログラムの中で、スウィングジャズのナンバーも、以前から取りあげられてきたが、ジャズだけをやるクラブも出てきている。2004年の秋に公開された映画「スウィングガールズ」のストーリーの中でも、ビッグバンドジャズなら少ない人数でもできるという発想が語られている。これは、矢口監督がヒントにした兵庫県立高砂高校の吹奏楽部の歴史にも見ることができると。 (<http://www.eonet.ne.jp/%7Eetakasago>)

昭和41年～49年／以後、楽器増えるが、指導者も無く、学生で細々と活動。演奏能力は？？？。文化祭・体育祭での演奏が年間を通して唯一の行事。部員も減るばかり。

昭和49年秋／OB有志（4名・その内の1名はいまだに関わっている）？が、「このままでは衰退するばかり。少ない部員でも出来るビッグバンドスタイルにかえる!!!」と。部員は驚愕。でもOBの熱い情熱？に、無理矢理納得。

このようにして、昭和50年からは、ビッグバンドジャズに取り組み、昭和52年からは、校外のコンサートにも出演し始め、徐々に力をつけ、現在は非常に活発なクラブとなっている。同様なクラブは他にもたくさんできている。中・高生へのジャズの普及を目的とした、日本学校ジャズ教育協会(JAJE) 関西本部が、1985年からJAPAN STUDENT JAZZ FESTIVALを主宰し、加盟校も2005年8月現在、47校になっている。この組織とフェスティバルは、同様に東日本でも、日本学校ジャズ教育協会東日本本部がJAPAN STUDENT JAZZ FESTIVALを開催している。また大学生を対象に、1970年以来「山野ビッグ・バンド・ジャズ・コンテスト」が続けられている(山野 2005)。ジャズは現在、音楽文化としても認知されつつある音楽ジャンルであり、有名なジャズプレイヤーが学校を訪れて、ジャズの啓蒙や指導を展開している。例えば、栃木県宇都宮では、当地出身者のサクソフォン奏者の渡辺貞夫氏が、栃木県で1995年に開催された第10回「国民文化祭

とちぎ'95」でブラジルの太鼓を指導し、同氏がサクソフォンを演奏したのをきっかけに、毎年「リズムスクール」を開催している。また渡辺貞夫氏は2005年の「愛・地球博」で政府出展事業の総合監督を、また「アフリカンフェスタ2003」では、プロデューサーを務めている。

以上見てきたように、管楽器による音楽活動は、金管と木管によるシンフォニックバンドという単一のスタイルだけではなく、アンサンブル、金管バンド、ジャズバンドなど、色々な形で活動が広がりつつあるのではないだろうか。このような多様化が今後の方向なのではないだろうか。

文献

- ・阿部勘二, 2001, 「「ブラバン」の不思議」, 『プラスバンドの社会史』, 青弓社.
- ・バダール, 1973, 「すばらしい日本の吹奏楽」, 『バンドジャーナル』1973年2月, 音楽之友社, P.52.
- ・『バンドジャーナル』, 1960年11月号, 1968年6月号, 1969年11月号, 1970年10月号, 1972年3月号, 1975年5月号, 1976(昭和51)年6月号.
- ・『学習指導要領』, 1958(昭和33年), 文部省.
- ・花村大, 1960, 「中学校における吹奏楽のあり方」, 『バンドジャーナル』1960年10月, 音楽之友社, P.8.
- ・堀井万里, 2005, 「若者の吹奏楽へのかかわりの変化」, 富山大学教育学部卒業論文(提出準備中)
- ・細川周平, 2001, 「世界のプラスバンド, プラスバンドの世界」, 『プラスバンドの社会史』, 青弓社.
- ・石川喬雄, 1976, 『バンドジャーナル』1976年6月, 音楽之友社, P.39.
- ・北中正和, 1995, 『にはんのうた』, 新潮社(新潮文庫), P.117-P.157.
- ・増井敬二, 1980, 「データ・音楽・にっぽん」, (財)民主音楽協会民主音楽資料館.
- ・『吹奏楽講座7』, 1983, 音楽之友社.
- ・杉山頴司, 1995, 『関東吹奏連60年の歩み』, 関東吹奏楽連盟, P37.

- 高澤智昌, 2001, 「バンドマン高澤智昌のライフヒストリー」, 『プラスバンドの社会史』, 青弓社.
- 『富山県立富山工業高等学校吹奏楽部三十年史』, 1987, 富山工業高等学校吹奏楽部同窓会編.
- 八木正一, 1991, 「吹奏楽部のあり方をめぐって」, 『季刊音楽教育研究』68, 夏号, 音楽之友社.
- 山野政彦, 2005, 「「山野ビッグ・バンド・ジャズ・コンテスト」にかける情熱」, 『音楽文化の創造37』, (財) 音楽文化創造.
- 山本武雄, 1987, 「金管楽器のルーツ」, 『バンドジャーナル』1987年7月号, 音楽之友社.
- 『全国楽器協会五十年の歩み』, 1999, 全国楽器協会, P.40.

注

- (1) 県立U高校は男女在籍ほぼ同数。このデータは、富山大学教育学部4年の堀井万里さんの了解により使用（堀井 2005）。
- (2) 吹奏楽部の名門、県立富山商業高等学校でも女子を禁止していたと書かれている。富山工業高等学校で、昭和52年度に女子の入部を許可したのは男子の部員の減少が原因である。解禁後は女子が徐々に増えていき、やがて昭和61年に男女数が逆転している。三十年史の最後の年、昭和63年の3年生は、男子6名、女子10名だが、その年の学年数は、男子239名、女子73名である。
- (3) この資料は、安田女子短期大学秘書科助教授中西裕氏の協力による。